

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

わたしとロダーリ①

池に小石を投げ入れて

竹田 理乃

ジャンニ・ロダーリという、めっぽう面白い作家をご存知でしょうか？

北イタリアのミラノあたりにある、湖のほとりの小さな街に生まれた、イタリアを代表する児童作家のひとりです。活躍したのは 1950～70 年代なので、同時期の日本の有名な文学作品を挙げてみると、川端康成の「山の音」や斎藤茂吉の「ともしび」くらいから、村上春樹の「1973 年のピンボール」前までの人といえば、分かりやすいのではないかと思います。

世界的に有名な作家ですし、いくつもの作品が和訳されているロダーリなのですが、ともにアニメーション作品の原案として有名なコッローディの「ピノッキオ」やデ・アミーチスの「クオーレ」といった古典名作がありますから、日本でイタリアの児童文学と聞いて、真っ先にロダーリを思い浮かべる人は珍しいかも知れません。また、思い切って始めてみたイタリア語が身につけてきて、まとまった文章を読んでみようと思った日本人が、まず挑戦してみるテキストといえば、やはり「ピノッキオ」が定番なのではないでしょうか。誰でもなんとなくはストーリーを知っていますし、キャラクターとしても親しみがあるから、読めそうな気がしますよね。19 歳だった私もそうでした。

大学の図書館で日伊対訳になっている「ピノッキオ」を見つけて、喜び勇んで借りて、そしてすぐに「あかんわ」と諦めました。次の授業のあと、がつり落ち込んだままそのことをイタリア人の恩師に報告して、本の選び方が悪いと笑われたのは

意外でした。曰く、「ピノッキオ」は意外と難しいとのこと。思えば、1881 年に連載が開始された作品ですもんね。和暦ではまだ明治時代、夏目漱石がティーンエイジャーだった頃の文章なんて、日本語でだってなかなか読めません。



【ジャンニ・ロダーリ】

出典：<http://www.ariles.it/en/gianni-rodari/>

私が「ピノッキオ」に挫折したのは、ちょうど 20 歳の誕生日をひかえた時期でした。両親が振り袖のかわりに贈ってくれた、生まれて初めての海外旅行でイタリアへ行くことが決まっていた私に、恩師は「最初の本は自分で選んでおいで」とアドバイスしてくれました。そんなわけで出会ったのがジャンニ・ロダーリ。ローマのテルミニ駅構内にある、ガラス張りになった壁がスタイリッシュな本屋

さんでのことでした。2月末日、淡い春の空いっぱい、ふんわりした陽光が広がっているような日でしたので、店内は照明よりも鮮やかな外の光が入って明るかったような覚えがあります。そこでぱっと目に付いた赤い背表紙。白い帯のなかにブルーの文字で書いてあった「Rodari Favole al telefono」というタイトルが、アルファベットばかりの本棚に圧倒されて鈍りかけていた脳のなか、きゅっと靴紐の締まるように日本語へと変化して、「もしかして読めるんじゃないの？」という期待が湧き上がったときのことは、ちょっと忘れられそうにありません。



【ジャンニ・ロダーリ】

出典：<http://bookclub.kodansha.co.jp/product?isbn>

=9784062149716

帰国してすぐ、こんなのを買って見ましたと見せに行ったところ、恩師はいい本を選んだと言って、とても喜んでくれて、まだ底冷えの去らない京都の路傍で声をかけたにも関わらず、その場でいっしょにページをめくり、おとぎ話を読むのに不可欠な《遠過去》の活用の復習までしてくれました。

あの時に読んだのは、ジェラートでできた宮殿のお話だったはずです。

短編集だったその本は、読みやすい作品にいくつか目を通しただけで、その後3年ほどお蔵入りしてしまったのですが、それから忘れかけた頃になると、ロダーリはひょっこり私のもとを訪れてくれました。イタリア留学を前にして、なにか日本語の本も持って行こうと書店に行けば、エッセイ集「ファンタジーの文法」を見つけたり、たまたまお世話になった先生は大のロダーリ好きだったり。

最初に暗唱できるようになったイタリア語の詩も彼のもので、ロずさむようになった後でロダーリの作品だったのだと知りました。もはや「私ってロダーリさんに好かれてるんじゃないかな」なんて考え始める始末です。たぶん、嫌われてはいないのでしょう。どうやら避けられてはいないようです。それにロダーリは教えたがる人で、私は彼から学びたいと願っている人なので、相性は悪くないと思うのです。

ロダーリは自分で物語を作るだけでなく、その創作方法を広めて、子ども達にも物語を作らせたがった人でした。先ほども触れた「ファンタジーの文法」には、彼が考え出した物語を生み出すための技術がいくつも載っています。そのなかでも、物語のスタート地点として真っ先に取り上げられているのが、《池に落ちた小石》のイメージを使って解説されている連想の仕組みです。

池に石を落とすと波紋が生まれ、それは水面に広がって、蓮や葦、紙の船、釣り人の浮きなどを揺らし、また沈む小石は水中でも、藻や魚や底の泥を動かして、ささやかながらも全てを把握しきることのできないほど多様に連鎖する変化を生み出します。ロダーリにとってことばも小石と同じで、それを精神に投げれば、その人のなかに蓄えられているあらゆる記憶や経験を巻き込んで、それらを関連づけていく波紋を生み出す力を持ちます。

ロダーリは「ファンタジーの文法」において、その働きの例を示すために、自らのなかに《sasso/小石》ということばを投じてみせてくれています。ロダーリのなかに落ちた小石は、まずその音の

つながりから《semina/種まき》、《silenzio/静けさ》、《salsa/ソース》、《sarto/仕立屋さん》といった《S》の音に連なることばや、《basso/低い》、《masso/岩》、《contrabasso/コントラバス》といった《ASSO》で終わる単語、また音ではなくって意味で繋がった《pietra/石》、《mattone/レンガ》、《roccia/岩》などにたどり着きます。

さらに深く沈んだ小石の動きが、個人的な経験と結びついて、ふと何かを思い起こすこともあるでしょう。追憶のなかに沈んだロダリーにとっての《sasso》とはといえば、彼が少年時代によく訪れたという《Santa Caterina del SASSO/石の聖カテリーナ教会》だったようです。この教会にロダリー少年とよく連れ立っていた友人アメデオは、いっしょに音楽を楽しんだバイオリン仲間でもあり、後に第二次世界大戦中に兵士となって出征したロシアで亡くなり、ロダリーに深い悲しみを残しました。傷ましいことですが、ロダリーがくこのことは、いまここでは関係がない。大切なのは、ぐうぜんに選ばれたどのようなことばであれ、時の塵埃の下に横たわっている記憶の原野を掘りおこす不思議なことばとして、どのように機能しうるかであるといっているように、ここで彼の喪失について考えるのは止しておきましょう。

ロダリーが得意とした空想的な小説を生み出すには、単なる連想ゲームに留まるわけにはいきませんし、先の章にはもっと楽しいアドバイスがめじろ押しです。ですが今のところは、ここまでで一息入れてもいいように思われます。私が書かせていただいているのはエッセイですから、とくにファンタジックでなくとも事足りるはずです。

なにかロダリーに関することを、エッセイ風に書いてみませんかとお話をいただいて、どうしたものかと鉛筆を握ったとき、真っ先に思い浮かんだのはテルミニ駅のざわめきでした。彼の作り出したおとぎの国のイメージでもなく、思い余って訪れた彼の故郷の風景でもなく、ありふれた児童書の売り場が思い出されたとき、私は自分のなかにロダリーという小石が投じられたのだという実感を持ちました。それが彼の言ったとおり、ちゃんと波紋を立てている。波紋が明らかにした、自分の生きてきた時間のなかに、著名人として本に載って

いる以外の、個人的なロダリーが存在しているという感触。日本で生まれ育って、自分なりにお近づきにはなってはみたものの、しがない片思いだとばかり決めつけていた私に、ちゃんとイタリアが染みこんでいるのを発見した、この嬉しさ。

ロダリーを知っているかと訊いたのに、彼についてはほとんど何も書いてないじゃないと言われてしまえば、今回のところはその通りです。いきなり彼の書いた作品の話なんてしてしまって、あらずじの紹介に終始したくありませんでしたから。

私が初めて手にした「*Favole al telefono*」は「パパの電話を待ちながら」という邦題で、イタリアに関するエッセイで有名な内田洋子さんの翻訳がありますし、「ファンタジーの文法」は窪田富男さんの訳で筑摩書房から出ています。両方とも文庫本で手に入るのので、ぜひ試してみてください。もしかすると、書店では光文社の古典新訳文庫に入っている、関口英子さん訳の「猫とともに去りぬ」や「羊飼いの指輪—ファンタジーの練習帳」の方が見つけやすいかも知れません。どれも「あ、そうくるか～」という発想の面白さは折り紙つきです。

日本イタリア会館でお勉強中の皆さんが、末永くイタリア語を続けてくださって、いつか彼との出合いを懐かしく振り返るときが来ますように。

[参考文献]

- 『パパの電話を待ちながら(*Favole al telefono*)』(ジャンニ・ロダリー著、内田洋子訳、講談社、2009)
- 『ファンタジーの文法』(ジャンニ・ロダリー著、窪田富男訳、筑摩書房、1990)

(当館語学講師)

うずまく不安とクセノフォビア

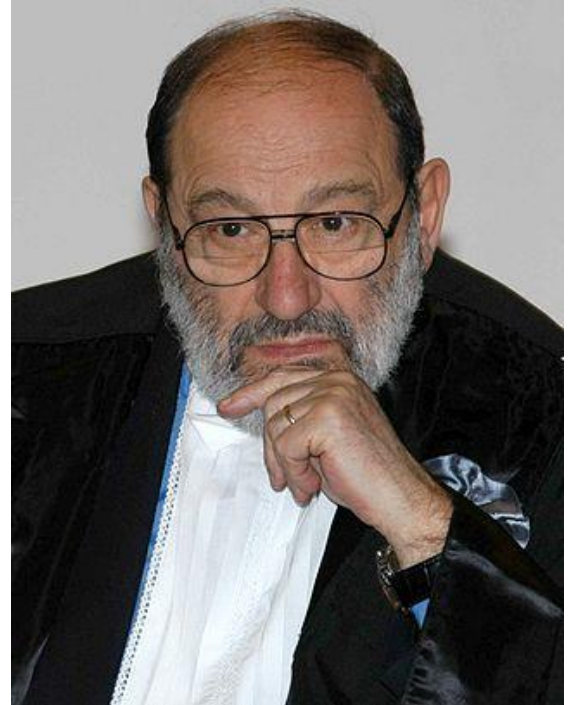
深草 真由子

「ファシズムは死に、埋葬された今日、いもしないファシストを相手に闘う反ファシストこそほんとうの脅威」とベルルスコーニは言う。彼だけではない。著名なジャーナリストから無名の SNS アカウントまで、なぜか反ファシズムに反感をもつ人は多い。「反ファシズム運動ほどひどいものはない」「反ファシストは radical chic semi-colti(学のあるリベラルな人々を侮蔑して呼ぶときに使われる表現)」。そんなことがよく口にされる。反ファシズムが特定の政党に利用された経緯もあるだろう。デモの最中に行き過ぎた行為も見られたことだろう。それでも、ファシズム反対を唱えることがまるで恥ずかしいことであるかのような空気ができつつあるのは、一体どうしたものだろう。

今のイタリアはどうも穏やかでない。とりわけこの二月、マルケ州マチェラータで起きた出来事は衝撃的だった。発端は若いイタリア人女性がバラバラ遺体で見つかった事件。殺害に関与した疑いで逮捕されたのが、イタリアに難民として入国し、麻薬の密売をやっていたナイジェリア人であったことから、「報復」を決意したあるイタリア人の男が、アフリカ系の住民を無差別に銃撃したのだ。赤・白・緑の三色旗を背中にまとい、手のひらを下に向けて腕をまっすぐに伸ばすファシスト式の敬礼をした格好で、男はカラビニエーレに取り押さえられた。スキンヘッドの頭にはナチス親衛隊の紋章が彫りこまれてあった。

いやな出来事が実に多い。セリエA、ラツィオの過激なサポーターらがライバルチーム、ローマのユニフォームを着たアンネ・フランクのステッカーを作成し、反ユダヤ的なメッセージをそえてスタジアムの壁に貼りつけた事件。スキンヘッドの集団が、コモの難民支援団体の事務所に押し入り、職員を威嚇した事件。北アフリカ系の少年らが、や

はりスキンヘッドの集団に暴行されたパヴィアの事件。左派系の新聞ラ・レプブリカに対する、極右政党からの「宣戦布告」事件。ロンバルディア州知事選に立候補していた(そして難なく当選した)政治家の「白色人種の危機」発言。トリノのエジプト博物館の、アラビア話者を対象にした期間限定の入場料割引が、イタリア人差別にあたるという抗議の声。街の壁になにげなく落書きされたハーケンクロイツ。



【ウンベルト・エーコ】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Umberto_Eco

ウンベルト・エーコの *Cinque scritti morali* (1997 年)に収録されていた『永遠のファシズム』が、今年になって再出版された。書店でこの本を手にしたとき、突然見知らぬ老紳士に「ファシズムは良いこともやったのだ」と迫られたことも、筆者にとってはショッキングな出来事である。やはり今、読むべきなのだ。

『永遠のファシズム』は 1995 年、アメリカのコロンビア大学で行われたシンポジウムにおけるエーコの口頭発表の原稿である。ファシズムは「永遠」、つまり一度死んで埋葬されても、姿かたちを変えいつでも復活する可能性があるということが説かれている。

政体は覆されましょう。イデオロギーは批判され、非合法化されましょう。だが、政体とイデオロギーの裏には常にある種の考え方、感じ方というものがある。それは一連の文化的な習性であり、謎めいた本能と不可解な衝動の集合体である。であれば(世界の他の国々のことには触れないでおくとしても)ヨーロッパを、今なお亡霊がうろついていると言えるのではないか？

ファシズムとは矛盾を内包する「さまざまな政治・哲学思想のコラージュ」であり、この論考においてそれは、過去に存在した(現在存在する)個々のファシズム政権と区別され、「原ファシズム」と呼ばれている。リストアップされている原ファシズムの十四の特徴はどれもが的確で、私たちのなんの悪意もない日常の思考や行動が、いかに民主主義を脅かす危うさを秘めたものであるかを教えてくれる。五つ目に次のようなものがある。

(原ファシズムにおいて裏切り行為として捉えられる)意見の対立は、相違のしるしでもある。原ファシズムは人間が本来もつ異なるものへの恐怖)を利用し、煽ることで大きくなり、合意を勝ちとる。ファシズムあるいはその初期段階の運動がまず最初に訴えることは、侵入者排斥である。よって原ファシズムは、定義上当然、人種差別主義的である。



【ランペドゥーザに到着した難民たち】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Centri_per_l%27immigrazione_in_Italia

上で言及した出来事のいくつかからも想像できるように、外国人のなかで今もっとも恐れられているのは、アフリカ大陸から来た人たちである。ア

フリカ系の移民と一口に言ってもさまざまで、イタリアの大学を出、イタリア人と結婚して、イタリア国籍を取得した人たち、そのなかには政治家になり、大臣を務めた人もいる。また滞在許可を得て、仕事をもち、子どもをイタリアの公立学校に通わせている人たちもたくさんいる。

しかし、今リビア沖から地中海を渡ってシチリアやカラブリアに入ってくるような人々のなかには、難民認定を何か月も何か月も待たされ、結局却下されてしまい、不法滞在者となる者たちもいる。「彼らのせいで治安が悪くなるかも」「テロが起きるかも」「エボラが蔓延するかも」。根拠のないことなのだが、イタリア人のあいだではこんなことがささやかれているのだ。



【メッシーナの施設の難民と職員】

移民を受け入れる側の心理については、母国を追われた経験をもつ社会学者で、昨年亡くなったジグムント・バウマンが *L'ultima lezione. La fine del mondo* で興味深いことを指摘している。

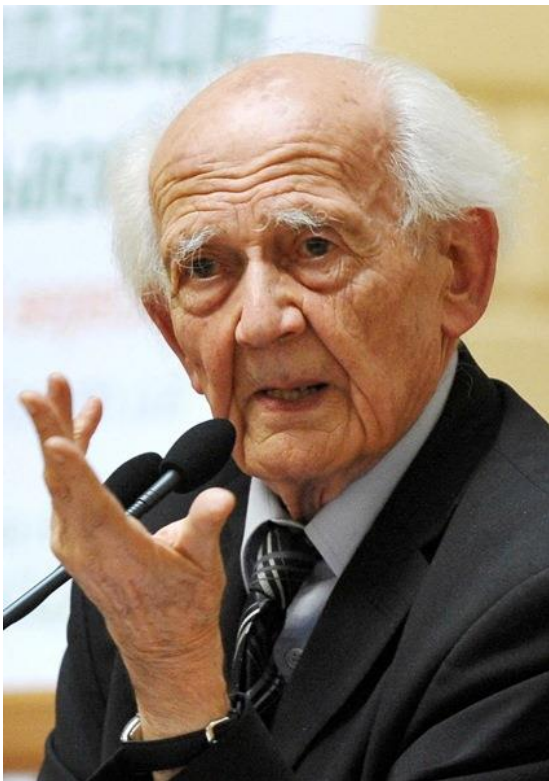
科学技術の発展にともなって人間の暮らしはより良くなるはず、という進歩の概念が崩壊した現代社会において、もはや未来とは不確実性と同義である。すでに不安と迷いのなかで現在を生きている私たちが移民に出会ったとき、心の底でなにを思うか。バウマンは言う。

(今日の移民は)古くなったパンの一切れやなにかしらの生活手段を求めて来るような貧しい人々ではない。教育を受け、裕福で、家を所有していた人々であり、われわれ、少なくともわれわれの大多数とおなじように、達成した目標にそれ

なりに自信をもっていた者たちである。そして突然にもかもを失い、ここにやって来て、住居もなく、将来の見通しもなく、仕事もなく、社会における居場所もない。

こうしたことがわれわれをますますパニックに陥らせた。というのもわれわれは、彼らのおかれた状況に、意識してかせずにか、おなじような災難がわが身にもふりかかる可能性を認めたからだ。

今われわれが安心して暮らしているように、彼らも数週間前までは安心して暮らしていたのだ。それでも彼らには起きるべきことが起きてしまった。



【ジグムント・バウマン】

出典：https://it.wikipedia.org/wiki/Zygmunt_Bauman

移民と自分たちを重ねあわせることで生じるもう一つの感情が〈妬み〉である。ときどき「イタリア人の障がい者が受け取る年金は月 800 ユーロ、移民一人にかかるコストは月 1000 ユーロ」と声を荒げて言う人(政治家を含む)がいる。

経済危機で職を失ったり、ブラックな労働を強いられていたり、ヨーロッパの他の国に働きに出

ていかざるをえない状況にある多くのイタリア人にとって、1000 ユーロというのは確かにかなりの額である。「イタリア人である自分たちは生活もままならないまま、放っておかれているのに…」そんな不平不満が出てきても、仕方がないのかもしれない。

ただし、この 1000 ユーロは、移民のポケットマネーになるわけではない。彼らに衣食住や医療のサービスを提供する団体に支払われるものだから、結局、支援にたずさわるイタリア人の利益になっているのが実際のところである。それでも「なんで移民にだけ？」という苛立ちはつのっていく。

イタリアに 50 万近くいると推定される不法滞在者。彼らの出身国への送還を訴える政党が、三月の選挙では大きく票を伸ばした。外国人に対するネガティブな感情が、一向に良くならない生活への不安と政治への不信感と相まって「イタリア人ファースト(Prima gli italiani)」を勝利に導いたと言えよう。

この国は一体どうなるのだろうか。そして私たちは「人間が本来もつく異なるものへの恐怖」「謎めいた本能と不可解な衝動」をコントロールするための理性を、どこで見失ってしまったのだろうか。

[参考文献]

Umberto Eco, *Il fascismo eterno*, La nave di Teseo, 2018.

(『永遠のファシズム』、和田忠彦訳、岩波書店、1998)

Zygmunt Bauman, *L'ultima lezione*, Laterza, 2018.

(元当館スタッフ)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>